

大衆文芸問答

国枝史郎

青空文庫

問 「大衆文芸と純文芸、どこに相違点があるのでしょうか？」 答
「純文芸は叱る文芸、大衆文芸は叱らない文芸。ざっとこんなよ
うに別れましょうかね」 問 「変な云い廻わしじやありませんか」
答 「ちつとも変じやありませんよ。ひとつ簡単に説明しましょう。
純文芸の作家連は、こう世間様へ申します。『俺の作は可よい作だ。
お前達よ、読まなければならぬ。読まない奴はヤクザ者だ』そ
ういう態度で書かれた物が、世に謂いう所の純文芸です。これに反
して大衆作家は、世間の要求に応じます。つまり世間の人達の方
から、大衆作家に云いかけるのです。『ねえ大衆作家君、僕等の
読みたいのは斯こういう物です。こういう物を作って下さい』 『は

いはい宜敷よろしうございますとも、そういう物を作りましょう』さて其処で作ります。そういう態度で作られたものが、世に謂う所の大衆文芸です」問「どうもハッキリしませんね」答「では語を変えて云いましょう。世間の嗜好を顧慮せずに、書いた物が純文芸で、その反対が大衆文芸です」問「そうは云つても、純文芸の中にも、世間の嗜好を顧慮したものが、随分あるようじゃありませんか」答「それは勿論ありましようね。要するに程度の問題です」問「世間の嗜好に投じてばかりいるのは、よい事ではありませんまい」答「まず嗜好に投ずるのです。それから作者の思う所を、ジワジワと世間へ伝えるのです。——面白可笑おがしく読ませ乍ながら、思う所を伝えるのです」問「純文芸よりも大衆文芸の方が、読者の

数は多いでしょうか？」答「ええ何うやら多いようですね。純文芸はルビ無し文芸、大衆文芸はルビ附文芸、これで解るじやありませんか」問「また変なことを云い出しましたね」答「ちつとも変じやありませんよ。ルビが無いということは、ルビが無くても文章の読める、教養のある人達を、相手にしているということになり、ルビが有るといふことは、仮名しか読めない人達をも相手にしているということになります。そうして世間を見渡した所、どうも仮名しか読めないような、そういう人達が沢山あります」

問「大衆文芸というものは、一体何時頃から始まったんでしょう？」答「それでは貴郎あなたへ反問します。純文芸というものは、一

体何時頃から始まったんでしよう？」問「ははあ夫れ^そでは貴郎としては、そういう問題を研究するのは、無駄であり不可能だというのですね」答「まず^{その}其辺におちつきましようかね」

問「大衆文芸というものは、何時頃から盛んになったんでしよう？」答「是^{これ}もハツキリとは云えませんね。だが思う所を云つてみましょう。博文館から講談雑誌が出、講談社から講談俱樂部が出た、その頃からじゃないでしようか」問「しかし其頃は二雑誌共、講談師や落語家の口演速記を、主として載せていたようですよ」答「それは将^{まさ}しくお説通りです。ところが夫れ等の口演物が、筋としては千篇一律、材料から云えば少なかつたので、その不足を補うため、大衆文芸家の作物を、掲載するようになったんです

ね。——だが勿論その頃には、大衆文芸だの大衆文芸家だの、そういう言葉はありませんでした」問「私の記憶に誤あやまりが無ければ、大衆文芸は震災後に、非常に盛んになったようですね」答「私もそんなように思つて居ります」問「これは何ういう訳でしょう？」答「説明するには及びますまい。震災で人心が険しくなり、浮世が暮らし悪くなつたので、其処で慰めて貰おうとして、雑誌や書物を読んだんですね。すると今も申しました通り、純文芸の作家達は、叱つてばかり居るでしょう。そこで人々は怯おびえて了しまい、あんまり叱らない大衆文芸家の、作物へ食い付いて行つたんです。それを見て取つた大衆文芸家は、宜敷いというので肌を抜ぬぎ——鉢巻ぐらいはしたでしょう、続々名作を出したんですよ。そこで

盛んになったんですよ。つまり需要と供給とが、程よく釣合が取れたんです」問「去年は随分純文壇の人が、大衆文芸を取り上げて、議論したようじゃありませんか」答「それに対して大衆文芸家は、^{ほとんど}殆ど答えようとはしませんでしたね」問「全くあいつは不思議でした。どう解釈すべきでしょう？」答「答えることが無かったのか、答えることを欲しなかったのか、まあ此^{この}二つに帰着しましょう」問「もし前者なら不合理であり、もし後者なら利口すぎますね」答「そうですね、各自意見がある筈ですからね。そうは云つても大衆文芸家の中には、そういう不合理の心境に於て、書いていた人もあったようです。だが公平にも然^そういう人の作は、世間の人

に受けて居りません。そうして幸さいわいにも然さういう人は、少すくないよう
 ございますよ。さて後ご者しやなら利口りこうすぎるといふ、この言葉も中あたつ
 ています。つまり貴郎きらうの云いおうとする処ところは、作家が評論ひんろんを兼ねる
 ということは、往々失敗しぱいを招まねくので、それで避よけたといふのでし
 よう？」問「まあ然さう云いつた所ところです」答「もう一つ突つ込んで云
 いますと、作家が何等いざれか説せつを建て、それが不幸ふこうにも間違まちがつていた
 り、或あるはひどく古ふるかったり、乃至ないしは他人たにんに反感はんかんを持たれたり、そ
 んなようなことがあつた場合、早速さつそく作家さかは裏うらを見られ、鼎かなえの軽重けいじゆう
 を問とわれるので、苦痛くつうであり損そんだといふ処ところから、障さやらぬ神かみに崇あが無な
 し、このイキキで説せつを建てなかつたんだと、屹きつと度どこんなようおに有あ
 仰つしやり度たいのでしよう」問「それに相違さいちありません」答「私も夫

れに賛成します。しかし私にはもう一つ、別の思惑があるのです。それは他でもありません。大方の作家というものは、断片的には物は云つても、系統立てて物を云うことは、大変下手だということなのです。そこで皆さんがやらなかつたのです、ええと、夫れから最^もう一つあります。お互同士何んとなく、遠慮し合つたという事です。ええと夫れから最^もう一つあります。創作の需要が非常に多く、論じる暇が無かつたのです」

問 「純文芸家の人達が、大衆文芸を論じ出したのは、一体何ういう理由でしょう？」 答 「大衆文芸が隆盛になり、一つの社会的現象として、無視することが出来なくなつたので、それで止むを得ず不本意乍ら、取り上げて論じたというものです」 問 「不本意

ながらと仰有るのは？」答「大衆文芸というものは、あらゆる階級へ行き渡り、多くの賛成者を持つていましたが、或る一団の人達ばかりが、つい最近まで非常に頑固に、これを軽蔑し無視していました。それは他ならぬ純文芸家です。下等だ、非芸術的だ、嘘っパチだ。こんなものは一切認めない。こう非常に威張つてね。だが其中今も云つた通り可成り隆盛になつたので、『うっちゃつて置くことも出来ないだろう、不本意ながら論じてやろうぜ』即ち恩惠的態度を以て、これを論じたというものです。だからご覧なさい今日に於ても、純文芸家の大部分は、何かと叱つてばかり居りますから。だが勿論或人達は、熱意を以て賛成し、且つ是を鼓舞してくれました。菊池寛さん、平林初之輔さん、藤井真澄さ

ん、加藤武雄さん、堀木克三さん、橋爪健さん、尚此他にもあり
ました。が、手許に参考書がありませんので、心覚えだけを記して
置きましょう」問「芥川さんが文芸時報で『大衆文芸というもの
は、寧ろ思想を織り込み易い、^{やす}そういう型の文芸だのに、どうし
て思想を織り込まないのだろう』こう質問して居りましたが、こ
れに就いてご感想は？」答「けだし是は名言です。まさしく大衆
文芸は、純文芸と比較して、却って思想を織り込み易い、そうい
う型を持つて居ります」問「簡単に説明を願ひ度いもので」答
「純文芸というものは、非常に極端に神経質に、完璧ということ
を必要とします。ですから思想を織り込むにしても、完璧性を傷
付けないように、織り込まなければならないのです、然るに一

方大衆文芸は、勿論完璧は望ましいのですが、純文芸のそのように、そう極端に神経質に、完璧ということが必要としません。尤も夫れだから純文芸家達から、長い間外道視されたんですがね。^{もっと}で、そんなように大衆文芸は、完璧性の方面では、今日大いに得をして居ります。即ち思想を露骨に織り込み、完璧性を傷付けた所で、叱られないというわけです。ですから大衆文芸は、寧ろ思想を織り込み易い、そういう型の文芸ですよ」問「それにもかかわらず大衆文芸は、思想を織り込んでいないのですか？」答「これも遺憾乍ら芥川さんの説に、従わなければならぬのです。尤も例外もございます。中里介山さんや白柳秀湖さん、それから時々テイマ小説のような、そういう作をする土師清二さんも、その

一人として数えられましょう」問「だが併しかし他の作家も、思想は織り込んでいるのですが、旨く人情でボカしているのです、目立たないのではないでしょうか？」答「これは有りがちな強弁です。いかに人情でボカしても、いかに技巧で眩くらまして、思想を織り込んだ文芸なら、それが滲んで出る筈です」問「なまじ思想を織り込むと、世間様は厭いやがりはしませんか？」

答「それは先刻も云いました通り、世間の人の嗜好を顧慮し、叱らずにジワジワと織り込んだら、まさか厭とは云いますまい」問「所で思想を織り込むとして、どんな思想を織り込む可べきでしょう？」答「これは一見愚問のようで、案外愚問じゃありませんな。……各作家の各自の思想、これを織り込むには相違ありません

んが、さて其思想が現代離れのした——秋田雨雀さんの云い廻わし方をもじれば——『昨日の思想』や『一昨日の思想』では、大いに困るといふことになります。けつきよく『今日の思想』なるものを、織り込まなければならぬのです」問「今日の思想、と有仰ると？」答「それは読んで字の如しです。今日の思想！とこう云つただけで、その内容が解らないような人には、今日の思想を説明した処で、けつきよく矢張解らないでしょうよ」問「では解つたとして置いて、その『今日の思想』なるものは、大衆文芸のみならず、純文芸へも織り込む可きでしょう？」答「それは云うまでもありません。だが併し大衆文芸へは、特に織り込まなければならぬのです」問「それはどうしたわけでしょう？」答

「大きな声では云われませんが、迂闊^{うつか}り大きな声で云つて、純文芸家達に知れようものなら、一喝を喰うのは見たようなものです。だから小声で云いますがね、どうも今日の純文芸は、書齋芸術の境地にあり、大衆文芸は夫れに反し、辻文芸の域にあります、で、書齋へ通るものは、勿論例外はありません、大方は教養ある紳士淑女です。ですから間違つて『昨日の思想』や『一昨日の思想』を伝えた所でその人達は取捨選択します。ですから比較的安全です。辻の方は然うは不可^いま^きせん。教養の無い連中の方が、一層多く通ります。で然う云う人達へ『昨日の思想』を伝えると、選択をせず^{しま}に信じて了います。ですから辻芸術たる大衆文芸は、特にしっかりと『今日の思想』を、織り込んで置かなければなり

「ませんね」問「織り込んでいる人があるでしょうか？」答「ええ、数人はありますよ」

問「去年からかけて今年迄に、^{まで}どういう大衆文芸家が、活躍したか教えて下さい」答「堀木克三さんがサンデー毎日で、五名ほど上げて居りました。その中四名だけ記しましょう。中里介山、白井喬二、長谷川伸、土師清二、これらの人でございますね」問「勿論この他にもあるのでしょうか？」答「あるともあるとも大有りです。あんまりあるので上げ切れないのです。特に大仏次郎さんなどは、働いた部に属しましょう。直木さんだって抜かせませんね。——だが以上は大衆文芸の中、鬚物に関して述べたのですよ。これ以外にも現代物があります。しかし今日大衆文芸と云

えば、大方齧物を指すようですね。大衆現代軽快物の方では、森
曉紅さん寺尾幸夫さんが、よい物を見せてくれました」問「大衆
文芸の功労者は？」答「よく働いて佳^よい作を見せた、数多くの大
衆文芸家と、大衆文芸を論議してくれた、数多くの純文芸家と、
大衆文芸を鼓舞してくれた、大衆文芸物の雑誌編集者です。特に
生田蝶介さんは、よい作家を産んでくれましたね。同氏今や博文
館を去る。しかし此人は大衆文芸家として、打って出るだろうと
思われます」

問「純文芸の作家連も、大衆文芸へ手を染めましたね」答「叱
り乍らも手を染めました」問「これに關してのご感想は？」答
「大して感想ありません。だが一言申しましょう。純文芸壇は

鎖国主義で、大衆文芸壇は開港主義だとね」問「防ぐだけの実力が無かったので、止むを得ず開港したんでしよう」答「そういう見方も一理あります。しかし夫れより重大なることは、明治初年の日本人達が、西洋人を迷信したように、大衆文芸家その人達や、大衆物雑誌の編集者達が、純文芸家の人々を、迷信したのが原因です」問「菊池寛さんが斯う云って居ります。『或る天分を持った者が、大衆文芸家として成功し、或る天分を持った者が、純文芸家として成功した』と」答「私にもそんなように思われます。しかし大多分の純文芸家は、それとは反対に云っていますね。

『純文壇へ来た所で、ウダツの上らない連中が、大衆文芸の畑へ行き、^{よっや}漸くウダツが上ったんだ』とね」問「それは勿論偏見でし

ようね？」答「いまだに象牙の塔に住み、唯我独尊主義を奉じている、偉い人達のご託宣でしょう」

問「此処で問題を変えましょう、探偵小説が流行つて来ましたが、探偵小説時代という、こんな言葉さえ云われて居りますが、これは信じてよいでしょうか？」答「可成り信じて可いようです」
問「可なりというのは何ういう意味です！」答「日本の純粹探偵創作壇、これを標準にして云う時は、多少割引が必要でしょう。

作家の数から云う時も、作品の量から云う時も、亦その質から云う時も、全盛時代とは云えません。但し探偵創作物が、日本の読書界に現われてから、僅々数年にしかありません。これに考慮に入れて云えば、可成り全盛になったなあと、感嘆しても可さそ

うです。だが立場を代えて云えば、探偵小説時代という、この掛声は是認出来ます」問「それを聞かせて戴きましよう」答「多くの大衆文芸の中へ、探偵質が織り込まれている。この点から云えば全盛です」問「個々の作家の特徴に就いて、御意見を聞こうじやありませんか」答「それはいつぞや読売新聞で、一通り云ったつもりです。そうして其後の作家評と、そうして其後の作品評とは、平林初之輔さんが新青年誌上で充分云つて居るようです」問「そうして貴郎は其説に、全部賛成しているのですか」答「それより私は斯う云い度いのです、平林さんがああ云つて以来、私の云うことが無くなったんだとね」問「それは大変お気の毒ですね」答「いや、ひどく可い気持です」問「純文芸の作家達が、探偵小

説へ手をつけましたね」答「大衆齧物へ手を付けたようにね」問
「その出来栄えは如何いかです？」答「それは甲賀三郎さんが、これ
も読売新聞で、既に批評をしています」問「それに貴郎は賛成で
すか？」答「そうです私は賛成です」問「現代日本の探偵小説壇
を、一口に云ったら何う云えましょう？」答「叱る人があるかも
知れませんが、私はこんなように云い度いのです。『西洋探偵小
説の、翻訳時代から一歩進み、創作時代へ這はい入ったんだ』とね」
問「翻訳にしる創作にしる、兎とも角かくも今日探偵小説は、流行して
いると思われませんが、その原因は何んでしよう？」答「私は探偵
小説をも、大衆文芸の其中へ敢あえて加えて居るものです。そうして
私は前段に於て、大衆文芸の隆盛になった理由を、説明して置い

たつもりですよ」

問「それは解つて居りますが、併し探偵小説という、特殊の名称のある物を、特に手中に取上げて、流行の原因を探るのも、不可能のことでは無さそうですね」答「それは勿論可能です。では簡単に云いましょう。ひどく平凡なことですがね。探偵小説というものは、秘密と秘密の曝露とを、取り扱った文芸です。ところで人間というものは、その二つを好みます。ですから探偵小説が、多くの人に愛読され、流行を来したと云いたいのです」問「しかし最近めつきりと、流行り出したのは何故でしょう？」答「その事に就いても最う私は、読売新聞や其他の雑誌で、断片的に云つた筈です。しかし最う一度繰り返しましょう。『探偵小説新趣味』

や『新青年』や『秘密探偵雑誌』これらの雑誌が震災前から、西洋探偵小説の、移植を計ったのが原因の一つ、その中新青年の編集者たる、森下雨村さんと小酒井不木さんが、優秀なる探偵小説家達を、日本人の中から選び出し、それを世間に紹介し、そうして夫れらの小説家達が、大方の期待に背むかないような、相当の佳作を発表したのが、探偵小説創作熱を、高める原因になったようです。最近に至って春陽堂が、此方面に力を尽くし、一層勢を高めました。見遁す^{みのが}ことの出来ないのは『探偵趣味の会』の事業です。最近に出来た会ですが、有益な仕事をやって居ります。孤塁奮闘松本泰さんが、女房役の中野圭介さんと、『探偵文芸』を発刊し、斯界に貢献しているのも、決して見遁してはなりません。

んね」問「優秀なる日本の探偵小説家には、どんな人達がいるのでしょうか？」答「春陽堂から発行された『創作探偵小説選集』これへ盛られた人達を、先^まず数えてもいいでしょう。尚この他純文壇の人で、数も多く質にも優れた、探偵小説を作つて居る人に、片岡鉄兵さんがいるようです」

問「最近に現われた斯界の名著は？」答「江戸川乱歩さんの『屋根裏の散歩者』これはまさしく好い本です」問「探偵小説の其中へも、思想を織り込むか否かに就いて、一部で論じられているようですね」答「論じる必要も無い程に、明瞭な問題にもかかわらず、矢張り論じられているようですね」織り込んだ方がいいと云うことも、織り込む可き思想とはどんな思想か？ どういう

手段で織り込む可きか？　これに就いては前段に於て、既に説明をして置きました。それをそっくり探偵小説へも、宛て箆はむ可きだと思えますよ」問「織り込んでいる人があるでしょうか？」答「大衆文芸齣物に於て、思想を織り込んでいる人が、可成り少数であるように、探偵小説の方面でも、織り込んでいる人は少いようです。そのみならず数人の人は、思想質なんか織り込んでは不可いけない。こう云つて力んでいるようですよ」問「本格物と変格物、この議論もありましたね」答「私の記憶に誤あやまりがなければ、たしかこの言葉は甲賀さんが、云い出したもののように思われますね。こういうような範疇をつくり、物を論ずるということは、便利という点で結構です」問「どっちの方が可いのです」答「これ

は問題になりませんなあ。若槻宰相が云って居ります、エエものはエエとして、ワリエものはワリエとして、是は全く名言です。

で私も云いましょう。本格物だってエエものはエエ、本格物だつてワリエものはワリエ、変格物だつてエエものはエエ、変格物だつてワリエものはワリエ」問「貴郎の好きな作家と作品は？」答「云えないこともありませんが、併し是は遠慮しましょう。私が好きだと云つた所で、その人とその人の作品が、価値を高めるものでは無し、結果は反対かもしれませんからね。それに第一『私が』だの、乃至は『俺が』だのをブラ下げると、ひどく垢抜けないことになり、田舎者が愈々田舎者になります。まあご覧下さい大トルストイだつて、あんまり『俺が』を鼻の先へ出すと、ち

つとも『俺が』を鼻の先へ出さない、大ドストイエフスキイの人や作へ、親しみを感じるじやありませんか。……だが一つだけ上げて置きましょう。牧逸馬さんが新青年へ載せた『短篇集』は愉快なものでした」問「大衆文芸問答も、まず此辺で切り上げましょうかね」答「思うことの十分の一、いや思うことの百分の一も、云われなかつたのは残念ですが、どうも致し方がありません。そうして私は思うのです。こんな鳥瞰的の記事に対しても、吃度叱る人がありますとね。どうしてあの作を問題にしなかつた、どうしてあの人をオミットしたかつてね」問「答えない方がいいでしょう」答「ところが然ういう連中に限つて、腕ツ節が強くて執拗でね。こいつにあ全く降参します」問「それは夫れとして、×

めましようかね。では、ちよつと鳥渡お手を拝借」答「さあさあ夫れで
はめめましよう」御兩人「シャンシャンシャンシャンシャンシヤ
ン……さあ、お開きになりました」

青空文庫情報

底本：「国枝史郎探偵小説全集 全一卷」作品社
2005（平成17）年9月15日第1刷発行

底本の親本：「新小説」

1926（大正15）年4月

初出：「新小説」

1926（大正15）年4月

入力：門田裕志

校正：hitsuji

2019年7月30日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

大衆文芸問答

国枝史郎

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>